

中国語の発音と会話

馬 鳳 如

Chinese Pronunciation and Speech

Fengru Ma

目 次

- 0. はじめに
 - 1. 発音と会話の関係
 - 2. 発音の学習
 - 2. 1 声母の発音
 - 2. 2 韻母の発音
 - 2. 3 声調の発音
 - 2. 4 音節の発音
 - 2. 5 二音節の発音
 - 3. 会話の学習
 - 3. 1 基本語気とイントネーション
 - 3. 2 ストレスについて
 - 3. 3 ポーズについて
- おわりに

はじめに

本稿では中国語の発音及び会話の教学の中で
の問題を探って行きたい。これらの問題は中国
語を教えていく上では常に存在する。他の外国
語を学ぶのと同様に、中国語もまた、発音や簡
単な会話から学び始める。発音と自然な会話の
異なる点は何であるか？中国語を学んでいく上
でどのような問題に遭遇するか？いかにそれを
解決するか？どういう点に努力すれば、正しく
自然にかつ流暢に中国語を話すことができるよ
うになるのか？これが本稿の扱う主たる課題で
ある。

1 発音と会話の関係

一般的には、発音とは声母、韻母、声調三者
のそれぞれの発音及び三者の結合であるシラブ

ル(音節)の発音を指す。ことに前の三者は教育、
学習の両面から重視されかつ教育上の効果も大
きい。また中国語会話については授業の時間が
比較的多いとはいえ、学生のレベルはそれほど
高くない。多くの学生は中国語を話すとき、
往々にして日本語訛でごちない。その原因の
一つとして、我々教師側の会話に対する指導技
術力の不足がある。会話の特徴を軽視し、会話
と発音を同一視して、一つ一つの漢字の発音が
正しければ良しとすることがある。

会話と発音は音声のカテゴリーに入り、密接
な関係にあるとはいえ、同時に多くの違いも存
在する。

1) 発音は分析的で会話は総合的である。

初めて中国語を学ぶ場合、声母や韻母、声調
から学び始める。この三つの成分が中国語の音
節を構成する。換言すればこれらの成分は音節
を分析した結果のものである。しかし会話は文
である。文は若干の音節からなる。会話の中に
単音節の文があるとは言え、声母、韻母、声調
だけで成り立つ会話はあり得ない。

2) 発音は静的なもので、会話は動的なもの
である。

発音は死んだもので、会話は生きているもの
と言っても良いだろう。声母、韻母、声調のい
ずれに関わらず発音はすべて正確であることが
要求され、わずかな差が語意の上で大きな違い
をもたらす。しかし会話は、型にはまりすぎて
はならず、一連の流れの中で音節は変化のある
生き生きとしたものとなる。その中でも最も顕

著なのは声調の変化である。例えば三声の変調や軽声である。また、同じ内容の話であつても、人が違えば表現の方法も違うはずである。つまり声母、韻母、声調で成り立っている音節は会話の流れに入った時によりよく生命力を持つものとなるのである。

3) 発音は単純であり、会話は複雑である。

発音を学ぶには発音の要領を十分に把握することが必要である。発音はただ一つしかない基準通りに、繰り返し練習することによって学び取れるものである。例えば声母のは両唇の破裂無気音である。この発音部位と発音方法の基準は一つしかなく、さらにもう一つ決めることはできない。韻母及び声調も声母と同様である。故に発音は単純なものである。が、会話はそうはいかない。会話はその本質から見て、一つ一つの音節の発音が正確であるばかりでなく、明確で生き生きと感情や意味を表す必要がある。そしてその中にリズム、語気、イントネーション、プロミネンスなどの多岐に渡るものが含まなければならない。つまり、会話を学ぶことは発音を学ぶことより難しいと言える。

4) 発音には感情はないが、会話にはある。

話し手の各種の喜怒哀楽の心の動き、例えば感嘆、疑問、要求などの語気はすべて会話の中で表現される。しかし純粋な声母、韻母、声調、更には音組でさえもこれらの感情を表すことはできない。例えば<ta(他)>、<lai(来)>、<le(了)>と<ta lai le(他来了)?>とは全く同じ意味ではない。つまり、会話の中に含まれる内容は音節の単純な組み合わせと決して同じではない。

5) 発音は基礎であり、会話は目的である。

なぜ発音を学ぶか? 即ち会話を学ぶためである。発音は会話の基礎で、声母、韻母、声調などの発音を学ばなければ会話を学ぶことはできない。しかし発音が十分にできるようになったからといって会話も上手になるかと言えば、そうとは限らない。なぜならば、会話はさらに多くの内容を含んでいるからである。勿論中国語を上手に話すには発音の基礎を確実に身につけなければならない。これは小学生が先ず初めに漢字や単語を覚え、次に短文や作文を学習するのと同じことである。

2 発音の学習

本章では声母、韻母、声調、音節の発音及び語音の変化などを学習していく上で生じる問題についての効果的な解決方法を探っていこうと思う。

2.1 声母の発音

中国語の声母の学習について日本の学生は二つのことに注意する必要がある。その一つは、捲舌音のzh, ch, sh, r, 摩擦音のf, 側面音のlを含む母語にない子音声母を習得することで、もう一つは母語の発音に近いb, d, g, j, zの五つの声母の発音を把握することである。これらの声母をいかに学習すればよいか、ここに多少の意見を呈したい。

1) zh, ch, sh, rの学習

ここでは二つの方法を利用することが考えられる。

その一、直接学習法、即ち中国式の方法による発音部位と発音方法からの学習法である。この方法を身につければ、発音は本物となるだろうが、理論性が大変高く、舌の位置や動きを会得するのは並大抵ではないので、習得するのは難しいであろう。

次に、間接学習法、即ち母語の音を元にして、その発音方法を少し変えて、声母をマスターする方法である。多くの学生が捲舌音を舌面音のj, q, xと発音するので、その原因を考えてみた。中国語のzh, ch, shと日本語の<じ, ち, し>はある程度の共通点があると思われる。従つて<じ, ち, し>の発音を基にして舌の位置、舌の形状を変え、捲舌音の声母を学び取らせたい。発音を教える前に、日本語の音と中国語の声母の音価上の相違をはつきりしておく必要がある。例えば<ch>と<ち>は同じ摩擦有気音であるが、前者は捲舌音であり、後者は舌面音である。そこで<ち>の発音を基に舌面音を舌先音に変え、その舌先を上を上げ、さらに少し後ろへ動かし、硬口蓋に当てる、そうすれば正しい<ch>声母を発音することができる。<し>から<sh>へも同様のことが言える。発音の変化の過程を下に示す。

ち—舌面音を舌尖音へ、舌尖を上へ上げかつ後方へ移動し硬口蓋に当てる—ch

し—舌面音を舌尖音へ、舌尖を上へ上げかつ後方へ移動し硬口蓋に当てる—sh

ch, shの発音を体得できれば, zh, rの発音にも応用することができる。zhとchの差は発音時の息の強弱だけであり, rとshの差は濁音と清音の違いである。つまりzh, rの発音について下の過程が利用できる。

ch—息を弱く出す—zh

sh—清音を濁音に—r

その他にも日本語から始める方法がある。例えば：

じ—舌面音を舌尖音へ、舌尖を上へ上げかつ後方へ移動し硬口蓋に当てる、濁音を清音に—zh

い—舌尖を上へ上げかつ後方へ移動し硬口蓋に近づける—r

この種の方法は日本語の発音を基礎としたものなので、発音の把握が簡単であり、とりわけ独学者には便利であろう。

2) fとlの学習

この二つの声母は英語の〈f〉, 〈l〉と同じ発音である。fは唇と歯の摩擦音で、日本語の中にはこの音がなくまた似た音もない。学生たちがfの発音を日本語の近似音〈ふ〉の子音〔フ〕で発音するのは正確ではない。だがfの音を発音するのはそんなに難しくはなく、上の歯で下唇(やや内側)を軽く噛む、問題はその位置が正確であるかどうかである。

lは日本語の子音〈r〉とは違って、舌尖を少し前面に出し、舌面は平たく伸すことが必要である。

3) b d g j zについて

この五つの声母は、すべて無気音の清音である。発音するときに声帯は振動しない。これらは、有気音のp t k q oと対立し、異なる点は息の強弱にある。また日本語の〈ば〉, 〈だ〉, 〈が〉, 〈じ〉, 〈ず〉等の音の前半分、ローマ字で記すと〈b〉, 〈d〉, 〈g〉, 〈j〉, 〈z〉と対応する。ただ音が清音であるか濁音であるかという点が異なる。そこでこれらの声母を学習するにはそれらの相対する二つの側面から始めるとよい。方言の影響により有気音の発音が比較的よい学生は、p t k q cの発

音の息を徐々に弱めていけば無気音のb d g j zを正確に発音することができる。次に日本語の子音からの練習の過程を示す。

b(〈ば〉)の前半—声帯を振動させない→b声母

d(〈だ〉)の前半—声帯を振動させない→d声母

g(〈が〉)の前半—声帯を振動させない→g声母

j(〈じ〉)の前半—声帯を振動させない→j声母

z(〈ず〉)の前半—声帯を振動させない→z声母

正確な発音の基準はただ一つしかない。どのような学習方法を採用しようとも最後に正確な発音にたどり着けば良いのである。このことは容易ではないが、教師の正確な指導と学生の反復練習が必要とされる。

4) 有気音と無気音の区別

有気音と無気音は全部で12ある。対応するのは6組で、それぞれb—p, d—t, g—k, j—q, zh—ch, z—cである。既に1)の中でzhとchの過程、3)の中でその他の5つの声母の発音について述べたが、いずれにせよ学生たちは有気音と無気音の区別が難しいと考えている。日本語の中には清音と濁音の区別があるだけで、有気音と無気音の対立は存在しないからである。しかも、これまでに学んだ英語の中においても有気音と無気音の区別で意味が変わることはない。実際には日本語の濁音と対立する清音は、すべて中国語の有気音とほぼ同じであるが、息が少し弱い。中国語の無気音はすべて清音であるが、日本語の無気音はすべて濁音である。そのため無気音の清音を学ぶときに、学生たちは清音の方ばかりに気を取られ、無気音であることをよく忘れてしまう。このことは中国語を学び始めた学生が付ける音標記号に見いだすことができる。爸爸(bàba)、青島(qīngdǎo)の発音をカタカナでそれぞれ〈ばば〉, 〈ちんとう〉と書いている。面白いことに中国の学生が日本語を学び始める時にも日本語の発音をピンインで表記する場合、勉強(べんがく)、人事(じんじ)を〈bengaku〉, 〈jinji〉と表す。彼ら是有気音と無気音の違いには注意を払うが、清音と濁音については注意を払わない。学んでいく上で有気音と無気音の区別が難しければ、中国語の無気音の発音を、暫くの間は日本式の濁音の発音で代替させても良いのではないかと考える。例えばjを〈じ〉と発音し、取りあえず有気音との区別を図つ

て(その後)に正しく直す)も構わないであろう。なぜならば、中国語の中では先に述べた6組の声母は清音と濁音の違いで意味の違いをもたらすことはないからである。これには中国の学生が日本語を学び始める時に使用するピンインがよい論拠となるであろう。

2.2 韻母の発音

韻母の発音には音価と音類両方の問題を含む。音類の問題については、日本語の漢字音を利用した中国語の前鼻音韻母<-n>と後鼻音韻母<-ng>の区分法など、多くの学者が言及しているので、本節では韻母の音価の問題を取り上げて分析したい。

1) アイウエオとaoeiu

日本語の五つの母音(アイウエオ)はローマ字で表記すれば、aiueoとなる。形式から見ると中国語の単母音のaiueoとは一致しているが、しかし実際には、両者の間には発音上、かなり大きな差がある。母音舌位図からも見いだせるように一番大きく違うのは<e>である。日本語の<e(エ)>は舌面前音であるが、中国語の<e>は舌面後音である。その次に<o>、日本語の<o(オ)>は標準母音の#6と#7の中間に位置するが、中国語の<o>は#7の標準母音である。その他にa-a(ア)、i-i(イ)、u-u(ウ)などは母音舌面図でそれぞれ同じ位置にあるが、口の開口度や唇形に差異が見られる。日本語の<ウ>の音価について、谷光忠彦など(『日本語学』p17, 1995)が[w]と記しているように、中国語の<u>と明かな違いが見いだせる。両者の差は唇が丸いか丸くないかの問題であり、さらに言えば丸さの度合いの問題である。おしなべて見るに、アイウエオの五つの母音の中で中国語と一番近いのは、<ア>である。口を少し大きく開ければ中国語の<a>である。<イ>の発音では舌先は下の歯の後ろに近づいてはいるが、<i>はさらに舌を平らにして前に伸ばし下の歯にくっつける。それに口は日本語の<イ>より左右に引く。一番難しいのが<e>の音である。初学者は皆[w]の音で発音する。[w]の音を基本にして、これより少し口を開き、上下の歯の間に指が入る位の隙間を開け、同時に口を少し左右に引く。<オ>の発音を基に

して<オ>よりもやや口を丸くすると<o>の発音になる。<ウ>の発音を基に口をすぼめる(唇を前に突き出す)と中国語の<u>の発音になる。

2) ü の学習

ü と<i>はいずれも舌面母音の前音、高音であり、違いは唇の形だけである。理論的に言えば、<i>の発音を基にし、口をすぼめれば良いのだが、実際はそう簡単ではない。以下の二点に注意する必要がある。その一、口をすぼめる時<u>の様に真ん丸ではなく、しかも唇を前に突き出さない。その二、正確な<i>の発音を基に練習をすること。もしも<i>の発音が正しくなれば、唇の形は正確であっても<ü>の発音は正確にならない。

3) ji, zi, zhi中のiについて

ji, zi, chi中の<i>はピンインでは同じ<i>と表記されるが、実際には発音は異なり、それぞれ違う類別に属する3つの母音である。国際音声記号では[i] (舌面音)、[ɿ] (舌先前音)、[ʅ] (舌先後音)と表す。すべて[i]のように教えることは、大きな誤りである。後の2つの母音は発音が難しく、中国語のピンインと国際音声記号の発音訓練を受けてない人には大変なので、音節全体の発音を指導する方が容易だろう。この場合、学生がzi, ci, siとzhi, chi, shi, riの韻母の違いや、またどちらも舌面音の[i]と区別があることを体得できるように配慮しなければならない。

4) 複合韻母を学ぶ上での3つの注意点

(1) 複合韻母の中では同一の音素であっても単母音が違う場合が生じる。音位学の見地からは一つの音位の中に常にいくつかの変体音位が含まれる。例えば/a/:a/A/ε/a。これらの音声上の微妙な差は中国語の26の字母では表すことはできない。変体の状況と内容は学生に十分に説明する必要がある。徐世榮は1980年に北京音の音位を精密に分析した。中国語を専門としない学生にここまで細かく説明する必要はないかもしれないが、複合韻母の発音は単に単母音を組み合わせただけのものではなく状況が違えば音素の音も違うと言う一点だけは理解させることが必要である。例えばzhi, zi, ie, aiの中の<i>,ei, ie, enの中の<e>,ai, ia, ianの中の<a>などはすべて異なる。

(2) 複合韻母の中の各要素を把握する。構造上から見れば複合韻母はおおよそ三種類に分類できる。介音と主母音から成るもの(例えばiaとuo)、主母音と韻尾から成るもの(例えばei, ao)、さらに介音、母音と韻尾から成るもの(例えばiao, uei)に分類できる。介音、主母音、韻尾は発音の上でおのおの異なる特徴を持つ。具体的に言えば、介音は引き締まっていたりかつ短い。韻尾は弱くて短い。主母音は強く長い。

(3) 日本語音で中国語音を発音してはいけない。日本語の音の中には、一見中国語の音に近いものがあり、これは二種類に分けられる。一つはヤ(ya)――ia, ワ(wa)――uaの類であり、もう一つはオ(o)――ao, ヨ(yo), ユ(yu)――iouの類である。前の類は韻尾を含んでいないので、二者の音は比較的似ているが、後の類は韻尾を含んでいるので、両者の差は主母音と韻尾の間の音にある。中国語では音の間に動きがあるが、日本語で表すと単母音になる。このことは学生達が複合韻母を学ぶ際に注意しなければならない点である。複合韻母の韻尾は-i, -u, -o(実は-uと同じ発音)の三つ(二つと言われる)である。学生たちは-u, -oを長音に発音してしまうことが多い。例えば“好”(hao)を<ホー>と発音するなどである。中国語の複合韻母は主母音の位置に関わらず前の音から後ろの音へ移動する際に徐々に変化をする。例えば「愛」(ai)の発音は、中国語の場合、a[a]からi[i]の間に少なくとも[ε]、[e]の座標母音を含んでいるが、日本語のaとiはそれぞれ独立した音節である。「来」, 「材」なども同様である。中国語はl-a-i, c-a-iのように発音するが、日本語はra+i, za+iのように発音する。そこで、学習していく際には急激な変化を滑らかな変化に変えていく必要がある。

〔5〕-nと-ngの区別

中国語には<n>と<ng>の鼻子音韻母があるが、日本語は<n>があるだけであり、ローマ字では<n>と記される。厳密に言えば<n>はnとngの中間の音であり、純粋なnやngとは差がある。または環境によって違う発音をする。例えば「今晚は」(コンバンハ)の中の<バン>は、nとngに敏感な中国人が聞くとbanのようでbanではなく、bangのようでbangでもない。また一般的に、<ペン>は

penの音に近くpengではない、<パン>はpangの音に近くpanではない。ここから判るように日本語の<n>の音には少なくとも二つの変体音位がある。即ち中国語のnに近い音とngに近い音の二つである。このことにはすでに一部の学者が注目していた。彼らは「案内」(アンナイ), 「案内」(アンガイ)の<アン>の違いに着目して中国語のnとngの指導に利用した。谷光忠彦等は(1995)<n>の変体条件について以下のように説明した。“/n/撥音で「雨天」などの語末では[n], [p] [b] [m]の前では[m], (散歩[sampo]), [t] [d] [n]の前では[n](身体[ʃintai]), [k] [g] [ng]の前では[ng](看護[kanggo])になりやすい。”<n>は後ろの音素の影響を受けやすいことを見いだせる。しかし同条件下での<ペン>と<パン>の中の<n>はどのように考えればよいのだろうか、前面の音も<n>に影響を及ぼすのだろうか。以下に分析を試みる。

(ア) n (イ) n (ウ) n (エ) n (オ) n

n ng n ng n ng

三種類に分けられる。1)イ段とエ段の後ろの<n>はnと発音される。例えば「員」, 「金」, 「園」, 「現」は[in] [kin] [en] [gen]と発音される。2)ウ段とオ段の後ろの<n>は大抵ngと発音される。例えば「運」, 「順」, 「音」, 「根」は[ung] [jung] [ong] [kong]と発音される。3)ア段の後ろの<n>のみがnと発音されたりngと発音されたりする。1)と2)の<n>は順同化表現で、3)の<n>は自由変体と見られる。もしもこのような分析が成り立つならば、前後の音素によって<n>の語音形態を観察することができ、さらにその音位変体を会得することにより、中国語の鼻音と対応する規則を見いだしてnとngの発音を習得することができる。

中国語の二種類の鼻音の韻母の差は主に韻尾に現れる。nとngの発音部位は異なる。nはd, tと同じ位置にあり、ngはg, k, hと同じ位置にある。鼻韻母を学ぶ際に更に一つのことには注意しなければならない。それは、例えばanとangの中のaは鼻韻尾が違うので異なる発音をするなどである。

2.3 声調の発音

中国語には四つの基本声調と軽声がある。また高低、上がり下がり、曲と直、長短、軽重の別も存在する。四つの基本声調を見ると、一声、二声、四声は直調で、三声は曲調である。三声は一番長く、四声は一番短い。軽声は軽く短く、上がり下がりの変化がない。声調図の上には僅かな一つの点で現れ、前音節の声調の影響を受け調値は一定ではない。従って重要なのは軽声の前の音節の声調をいかに正しく発音するかということである。日本語の音節のアクセントは、ただ高低の差があるだけで、おおかたは高いか低いかの平らな調子で、上がり下がりや曲がりの調子がないので、中国語の一声を学ぶには問題はない。その他の声調は往々にして種種の問題が生じる。二声が上がりがきらない、四声が下りがきらない、三声の前半部の低さが不十分で長さも足りない、これらはよく見かける現象である。ここでは、声調の高さ長さの区別ができるようにすること、特に三声の調値の問題を指摘したい。理論上から言えば、三声は降りて上がる調子の形である。普通、214の調値で表されるが、このことが往々にして人々の誤解を生む結果となっている。そのため、前半部の下降の幅(2度から1度)が小さく、発音も短くなり、後半部の上昇の幅が大きく、発音も長くなることが多い。実際には、前半部と後半部では音の長さに大きな違いがある。前半部の長さは声調全体の3/4を占めていて、後半部は僅か残りの1/4にすぎない。前半部の調子は先ずやや下降し、そしてすぐ平らになる調子であり、しかも平らな部分がほとんどを占め、まるで低平調形に聞こえる。人によって「低一声」と言う。これは三声(前半部)の特徴をよく捉えている。徐世榮(1980)が三声の調値を2114と解釈するのは科学的である。これは三声の調値を客観的に表しただけでなく、前半部と後半部の音長をも明らかにした。要するに三声は下がればすぐに上がっていく調子ではなく、その特徴は前半が長く、後半は短く、音の平らな部分が前半部の基調を成している点にある。もしも機械的に「昇降」と解釈するならば必ず発音の間違いを引き起こすこととなる。日本語の方言の影響により、中国語の声調を学習していく上で難しいと感じ

る点は地域によって異なるであろう。九州地区の熊本、久留米一带の方言の影響を受けている人々は更なる努力をされることを筆者は望む。

2.4 音節の発音

音節は声母、韻母と声調の有機的集合体である。正確な声母韻母、声調の発音は音節の正確な発音の基礎である。しかし音節はこれら三つを機械的に寄せ集めたものではない。音節を学んでいく上で以下に述べるいくつかの点に注意する必要がある。

1) 声母の本音と韻母を併せて用いる。

声母の本音は比較的曖昧であるので、声母を教えるのに便利なように「呼読音」という形式を多く採用している。例えばbpmの後ろにoを付け、gkhの後ろにeを付ける。韻母と併せるときは「呼読音」の中の母音を取り除かなければならない。以下の比較を見てほしい。

* b(o)→u→bou b→u→bu

* j(i)→ü→jü j→ü→jü

2) 韻母は声母に対してある影響を及ぼす。

主に二つの側面において現れる。一つは韻母が「合口呼」または「撮口呼」の時、声母も圓唇音に変わる。例えばg→u(圓唇)→gu(圓唇)、q→ü(圓唇)→qü(圓唇)のように声母の唇の変化が韻母の制約を受けている。次に合口呼韻母と結合したとき、舌先後音声母は圓唇音を作るのに適する様に僅かに変化する。一部の学生はzh, ch, sh, rと「開口呼」、「齊齒呼」類の韻母との音節を発音するときは比較的自然而であるが、「合口呼」の韻母との音節(特にu)のときは不自然である。例えばsh→uをshurと、zh→uをzhurと発音する。原因としては、初学者は舌を巻き上げる動作と唇を丸くする動作を完全に同時に行うことができないからである。合口呼韻母は声母の圓唇を制約するが、これらの音を発音練習をするときには先に口をすぼめ、そして発音するという方法を取ればよい。u→zhu, u→shuのようにである。これにより、自然と声母の発音部位は僅かな変化を見せる。このような練習方法を採用することは、その他の形式の声母と韻母が結合している音節の発音練習にも有効である。例えば

i→bi, pi, mi, ji, qi, xi, li, ni

u→bu, fu, du, gu, hu, zu, lu, nu
 ü→jü, qü, xü, nü, lü
 e→ge, ke, ze, ce, she, re, le, de

2.5 二音節語の発音

二音節語の発音の学習は声母、韻母、声調、音節の学習と会話の学習の間の重要なステップである。単音節を基礎にするが、単音節とは大きな差がある。その自由度と可変性が最も重要な特徴である。だからこの数年来二音節の発音の学習はますます重視されている。本節では主に二音節語の声調の変化と軽重音の問題について簡単に説明したい。

2.5.1 声調の変化

周知のように中国語では四つの基本声調と軽声がある。それらは二音節語の中で20種の構造形式と9種の声調変体を構成している。その構造形式は

1声—1声1声—2声1声—3声1声—4声1声—軽声
 2声—1声2声—2声2声—3声2声—4声2声—軽声
 3声—1声3声—2声3声—3声3声—4声3声—軽声
 4声—1声4声—2声4声—3声4声—4声4声—軽声
 である。また、この中の9種の声調変体は大きく2種類に分かれる。

① 55, 35, 214, 51など四種の声調音位を含む。それぞれは後ろの音節の1声、2声、3声、4声の調値であり、単音節のそれと一致している。なお「3声—3声」の中で前の3声が35調値となり、2声に変調する。以上の4つの調値は四声の基本調値であり、声調を学ぶときに必ず学習するので、大きな問題とはならないと思う。

② 211(半3声)、53(半4声)と2, 4, 1など五種の声調音位変体を含む。前の2つは前の音節に、後ろの3つは後ろの軽声音節に付く調値である。詳しく言うと、211は3声の変体で、後ろの音節が3声でない場合に適用される。53は4声の変体で、後ろの音節が4声の際に適用される。なお2, 4, 1はすべて軽声の変体で、それぞれ前の音節が1声或いは2声、3声、4声の際に適用される。

すでに述べたように211(半3声)の読み方は低くて平らな調子なので、一部の中国語テキストでそれを高くして平らな調子(1声)と対応させながら

説明しているのは本当に良い考えだと思う。中国で出版された中国語学を専攻する学生向けの大学「現代漢語」では、この半3声の調値を21のように示しているが、実際の発音と大きな差がある。徐世榮(1980)は3声の調値に関して次のように指摘している。“特に3声では、中間部の低く平らの部分为中心で、末尾部分が短く急に上がる(これは<半3声>の調子変化の主な条件である)”(筆者訳)。

日本語の軽重音を利用して中国語の半3声の発音練習ができる。「飴(アメ)」、「橋(ハシ)」の中の<ア>と<ハ>の発音は低くて平らで、中国語の半3声によく似ている。

軽声の調値は前の音節の声調により変化するので、前の声調を正しく発音しなければ軽声の発音は正しくできない。これは重要なポイントである。もう一つのポイントは軽声自体は軽くて短いという特徴である。声調座標図上では一つの点でしかない。この二点に注意すれば、軽声の発音については問題が生じないであろう。

2.5.2 軽重音の問題

中国語の二音節語の読み方は後ろの音節が軽声であるか否かを基準にして大きく二種類に分かれる。後ろの音節が軽声である場合必然的に「重—軽」の形式が要求される。それ以外の場合は明かな軽重を要求されないようである。具体的な表現は以下の1)と2)である。

1) 「重—軽」式

主に語尾が「子」、「头」である語、一部の疊語、単純語、方位語などである。例えば

房子 石头 奶奶 弟弟 玻璃 核桃 萝卜 上面 底下 月亮

発音練習をする際、重さのことだけではなく、音の長さも注意する必要である。前の音節の長さが不足すれば後ろの軽声の短いという特徴は明らかにされないからである。

2) 「中—重」式

前の音節より後ろの音節が少し重く長いのがこの形式の特徴である。この形式には普遍性があり、上述の1)を除いてほとんどの二音節語はこの形式を採る。例えば、

衬衫 新年 顽强 老师 电灯 决定 珍宝 借鉴 朗读
 この形式では、前後二音節の軽重、長短の面で

の差は1)と比べて随分小さいが、前後二音節を比較すれば、その差ははっきりと分かる。特に前後が同じ声調の場合は、絶対に前の音節を強く長く読んではいけない。

周知のように日本語にも軽重音がある。例えば〈ハシ〉(箸)、〈アメ〉(雨)、〈イミ〉(意味)などは中国語の「重一軽」式の言い方と基本的に同じであるが、〈ハシ〉(橋)、〈アメ〉(飴)、〈イク〉(行く)などは中国語の「中一重」式とは完全に同じではない。それらは音の高さの違いで表され、明確な音の強弱では表されないからである。

3 会話の学習

会話は音声知識の総合的な運用であり、多くの静態的な音声知識に基いた動的なコミュニケーションの手段である。またイントネーションも不可欠である。従って、声母、韻母、声調及び音節の発音が正しくても中国語をうまく話せるとは言えない。(第一節を参照)

会話は朗読とも異なる。会話は意思をはっきり、正しく述べれば十分であるが、朗読はそのほかにまた生き生きとした、聴衆を感動させるような表現が要求されるもっと高いレベルでのコミュニケーションの手段である。しかし両者には多くの共通点があるので、会話を学習する際に朗読の技法を参考にするとよいと思う。しかし、会話がテキストを暗唱するようになってはいけない。

どうすればうまく中国語を話せるようになるか、どうすればごちなさを避けられるか。もちろん多くの知識が必要であるが、最も注意すべき点は以下のことであろう。

3.1 基本語気とイントネーション

音節に声調が付いているように、言葉には必ずイントネーションがある。どのような語気、イントネーションで話すかは話し手の心理状態によって決まる。話のもたらす効果は話し手の語気とイントネーションにより決定されるのである。一般的に、中国語の文では平叙、疑問、願望、感嘆など4種の語気がある、これらは基本的に2種のイントネーションで表せる、疑問語気は上昇の、それ以外は下降のイントネー

ションを採る、と認識されている。しかしそういう説明だけでは学生が理解しにくいので、もっと具体的に説明する必要がある。

1) イントネーションは主に末尾の単語に表されるが、文末の単語だけには限定されない。例えば次の例の中の「来」。

- a、他明天来? (彼は明日来ますか。)
- b、他明天来吗? (彼は明日来ますか。)
- c、他明天来不来? (彼は明日来ますか。)
- d、他明天来。 (彼は明日来ます。)

例a、dでは末尾の「来」は文の主なイントネーションを担っている(aでは上昇の調子で、dでは下降の調子である)が、例b、cでは末尾の語気詞「吗」と二番目の「来」ではなく、その前の「来」が担っている。

2) 命令、催促の意味を表す文のイントネーションは完全な下降の調子でも、完全な上昇の調子でもない。従っていつも下降の調子にする、不自然な感じがしてくる。

- e、赶紧走啊!(你停下干什么?)
(急いで行きなさい。)
- f、快说啊!(你怎么哑巴啦?)
(早く言いなさい。)
- j、快跑!(别停下!)(速く走れ。)

文の末尾に語気詞があるかないかによって語気とイントネーションには多少の違いが生じる。また、語気詞が異なると、イントネーションも異なる。赵元任(1968)は、「吗」で終わる疑問文では、イントネーションが比較的高く、文末が少し長くなるが、疑問助詞「吧」は音が短く、イントネーションもやや低いと論述した。同じ疑問文だが、どうして「吗」の付く疑問文はイントネーションが高く、「吧」の付く疑問文のイントネーションは低いのか。湯廷池(1989)は、恐らく「吧」の付く疑問文は平叙文に近く、疑問の程度が軽いためであろうと説明した。

3) 特殊なイントネーション——曲がりの調子
上昇、下降二種のイントネーションの他に、中国語では曲がりのイントネーションがあるので、注意しなければならない。このイントネーションは風刺の語気を表すのに特に適している。言外の意味は、単に上昇或いは下降の調子では強調できず、曲がりの調子でしか正確に表

せない。例えば次の例。

「我不好，你好！可以了吧？我不好，我偷着养汉子，谁不知道啊！叫警察抓起来，还说『警察说不全怪我。』你多好啊！」

(あたしは悪い、あんたはいい、いいでしょう。あたしが不倫だ、誰でも知っているじゃないの。警察に逮捕されても、まだ、「すべてがあたしのせいじゃないと警察が言っていた」と言うなんて。あんたはほんとにいいなあ。)

この話しは殆どすべてを曲がりのイントネーションで表現する必要がある。話し手は強く相手の欠点をあばいて反撃しているので、字面の裏に深く風刺の語気が満ちあふれている。もしも全部下降の調子で言えば、本来とは全く反対の意味となるであろう。

4) イントネーションの声調への影響

イントネーションと声調は同じレベルのものではないが、両者の昇降の形には共通点があるので、影響しあうことがある。次の例を見てほしい。

- a、他叫我去。(彼は私に行かせるの。)
- b、他叫我去。(彼は私に行かせる。)
- c、你明天能来？(あなたは明日来られるの。)
- d、我明天能来。(私は明日来られる。)

例bでは両方とも下降の形で、cでは両方とも上昇の形である。二つの文ではイントネーションと声調が一致しているので、影響を与えない。しかしaとdでは一致していない(「去」の声調は下降の形で、文のイントネーションは上昇の形である。「来」の声調は上昇の形で、文のイントネーションは下降の形である)。その場合に声調の調値が自然に少し変化する。例えばaの中の「去」はやや下降する形へ、dの中の「来」はやや上昇する形へ変わる。

3.2 ストレスについて

ストレスは会話の学習の中でたいへん重要なポイントである。うまく運用すれば、話の重点を分かりやすく伝えられる。一つの文の中のどの単語にストレスを置くのか。一言で言うと、ストレスは話手が強調したい内容の中心に置かれる。言語活動にはすべて環境がある。他人になにかを教えたり、聞いたり、命令したり、或

いは請求するなど様々な場面において情報は伝達される。そこには新情報と旧情報が混在しているが、会話では新情報が強調されなければならない。次の会話の例是北京語言文化大学の中国語教科書より引用した。

马老师：你是哪国人？(あなたは何人ですか。)

高木：我是日本人。您贵姓？

(日本人です。お名前は。)

马老师：我姓马。你叫什么名字？

(馬です。あなたの名前は何と言いますか。)

高木：我叫高木好文。

(高木好文と申します。)

……

丁力：你在哪儿学习？

(どこで勉強をしていますか。)

高木：我在北京语言文化大学学习。

(北京語言文化大学で勉強をしています。)

丁力：你学习什么？

(何を勉強していますか。)

高木：我学习汉语。

(中国語を勉強しています。)

丁力：谁教你们汉语？

(誰が君達に中国語を教えていますか。)

高木：马老师教我们。

(馬先生が教えてくれます。)

以上の会話文の中に下線を付けた語句はすべて文の情報の焦点であるので、強調する必要はある。応答の文では、焦点を示す語句だけで答えてもよい。つまり、会話の際には、情報の焦点を示す部分を強く高くゆつくり話し、他の部分は弱く低く速く話せばよい。どの語句にストレスを置くかについては以下を参考にしてほしい。

1) 繰り返し現れる語句は新情報ではないので、ストレスを置かない。

丁力と高木の会話の中で「学习」という単語は繰り返し4回現れたが、すべて旧情報であり、ストレスは他のところに置かれる。次の童謡ではストレスの置き方はどうであろうか。

山上有个庙，庙里有个缸，缸里有个盆儿，盆里有个碗儿，碗里有个豆儿，豆叫老和尚吃了。

(山の上に寺がある。寺にかめがある。かめに鉢がある。鉢に碗がある。碗に豆がある。豆は

年寄りの坊さんに食べられちゃった。)

短い童謡に「庙」, 「缸」, 「盆」, 「碗」, 「豆」などは二回繰り返し現れたが、一回目にしかストレスを置かれぬ。

2) 疑問詞疑問文の疑問詞には常にストレスを置く。

谁告诉你的?

(誰から聞いたのですか。)

我们几点出发?

(私たちは何時に出発しますか。)

你爸爸在哪儿工作?

(お父さんはどこに勤めていますか。)

你怎么去?

(どうして行きますか。)

それぞれは具体的な人、時間、職場、方法を中心に質問している。

3) 反復疑問文では「x不x/x没x」のうちの前のxによくストレスを置く。

你还去不去了?

(一体行くのですか、行かないのですか。)

他结没结婚?

(彼は結婚していますか。)

孩子想不想妈妈?

(子供はお母さんを恋しいですか。)

もちろん「x不x/x没x」の後ろの語句にストレスをおく場合もある。それは、話手が強調する中心によって決まる。

4) 動詞の後の結果補語、可能補語にはいつもストレスを置く。

我已经吃饱了。

(私はもうお腹がいっぱいになった。)

房子盖好了。(家は完成した。)

这么多饭我吃不了。

(そんな多くの料理は私は食べきれない。)

5) 方向補語、程度補語などの前の動詞にはよくストレスを置く。

他终于站起来了。

(彼はやっと立ち上がりました。)

老婆子, 你坐下, 咱们说说知心话。

(お姉さん, 座って気心の知れた者同士の話をしましょう。)

哎呀, 吵死人了, 你安静一点好不好!

(もお, うるさい。静かにしてくれ。)

6) 比較文では述語或いは補語にストレスを置く。

北海道比东京冷。(北海道は東京より寒い。)

他比我个子高。(彼は私より背が高い。)

北海道比东京冷得多。

(北海道は東京より随分寒い。)

他比我个子高多了。

(彼は私よりかなり背が高い。)

7) 比喩、誇張を表す語句には常にストレスを置く。

她呀, 嘴跟个刀子一样。

(彼女はね, 口が辛辣の人だよ。)

为了亿万同胞的翻身解放, 就是粉身碎骨我也心甘情愿。(億万の同胞を解放するために、身命を惜しまず努力するつもりです。)

ストレスをおく語句が軽声であっても、軽声のままで発音する。ストレスが声調に殆ど影響を与えないからである。もう一つ説明する必要があるのは動詞の後ろの人称代名詞は、強調する必要がなければ、声調符号が付いても、普通軽声で発音する。これは一般的な規則である。例えば「你为什么骂他?」, 「他欺负我。」の中の「他」と「我」は元の声調で発音すると、大変硬い感じがする。

ストレスが置かれる文の要素はまだ多いが、紙面の都合により、割愛する。

3.3 ポーズについて

ポーズは有声言語では感情と意思をおもてに表す不可欠の手段である。聞き手はポーズの間に、受け取った情報を理解し、整理する必要がある。話手にとっては一息入れる必要もある。初級会話の学習の中ではポーズの運用がさらに重要だと思われる。一つの文をいくつかの語節に分けて言った方が言い易く間違いがないからである。ポーズはどこに入れれば良いか。次に北京語言学院が出版した『新漢語三百句』より例を引用して分析したい。

那位先生 | 是谁?

(あの方は誰ですか。)(主語と述語の間)

他 | 不是教授。

(彼は教授ではない。)(主語と述語の間)

你叫 | 什么名字?

(あなたの名前は何と言いますか。)

〈動詞と目的語の間〉

这位是 | 格林先生。

(この方はグリーンさんです。)

〈動詞と目的語の間〉

他在 | 哪儿工作？

(彼はどこに勤めていますか。)

〈介詞と目的語の間〉

你汉语说得 | 怎么样？

(君は中国語を話すのがどうですか。)

〈動詞と補語の間〉

你以前 | 学过中文吗？

(君は以前中国語を学んだことがありますか。)

〈状語と動詞の間〉

以上の例から見れば主語と述語、動詞と目的語、介詞と目的語、動詞と補語、動詞と状語の間にポーズをおくのが普通である。またそれらに限らず、具体的な場面によってどこにポーズをおくかは決められる。

また、同じ文でもポーズの位置が違えば意味の違いが生じる。その際、文の持つ意味によってポーズの位置は比較的固定され、変更は不可能である。次の例のaとbを見てほしい。

1. 他老说不听话。

a. 他老说我 | 不听话。

(彼は私に人の言うことに従わないとよく言った。)<二重目的語文、“不听话”なのは“我”である>

b. 他老说 | 我不听话。

(彼は、「私は人の言うことに従わない」とよく言った。)<主述文、“不听话”のは“他”である>

2. 我们都叫他小胖子。

a. 我们都叫他 | 小胖子。

(私たちは皆彼をでぶと呼んでいる。)<二重目的語文>

b. *我们都叫 | 他小胖子。

つまり、二重目的語文ではポーズのもっとも適当な位置は二つの目的語の間であるが、主述構造が目的語となる主述文では目的語のまえが適当である。ごく単純な文でもポーズの位置が違えば、意味の上で大きな差が生じることになる。例の3がそうである。

3. 饭都吃完了。

a. 饭 | 都吃完了。

(ご飯は全部食べました。)<全部を表す>

b. 饭都 | 吃完了。

(ご飯はすでに食べました。)<時間を表す>

4. 你想谁来？

a. 你想 | 谁来？

(君は誰がくると思いますか。)

b. 你 | 想谁来？

(君が誰を懐かしがっているんですか。)

従って3, 4のaとbは次のように言い換えられる。

3a' 饭全部吃完了。

3b' 饭已经吃完了。

4a' 你认为谁来？

4b' 你想念谁来？(“来”は軽声と発音する)

イントネーションやストレスやポーズなどは会話の中に孤立して存在しているものではない。一方では各々の特徴を十分に表すが、他方ではお互いに密接な関係にあるので、完全に区分するのは不可能である。例えばストレスの置かれる語句は一般に強く、高く、ゆつくりと話されるが、内容によっては、時には高く、時には低く話されなければならない。ストレスを強調するためにその前或いは後ろでポーズをとるのも普通であろう。

おわりに

以上中国語の簡単な発音と会話の学習方法を紹介した。初心者には少し役立つかもしれない。はじめて中国語を学ぶ際に「ヒョウタンにならってひさごをかく」ことは必要であると思う。そういうふうに練習を続けると月日のたつうちに中国語の会話能力は必ずや習得されるであろう。

参考文献

- 徐世榮「普通話語音知識」文字改革出版社 1980
 黃伯榮「普通話語音教程」青島出版社 1988
 谷光忠彦等「日本語学」酒井書店 1995
 湯廷池「國語疑問句的研究」學生書局 1989
 北京語言學院「新漢語三百句」北京語言學院出

版社 1984

馬鳳如「淺談朗誦中的彎曲語調」山東師大 1982